

判官びいきの義経，殉教者のアルフサイン — その“最期”の間に揺れる日本人と イスラム教シーア派との捉え方の違い —

アハマド M. F. M. ラハミー

“Pitted and Cheered Yoshitsune” and “the Martyr Alhussain”: Differences of View Points between Japanese and Shiites Regarding their Tragic Ends

AHMED M. F. M. RAHMY

要 旨

1189年に本州北部の奥州衣河で、源義経は庇護者に裏切られ自害を余儀なくさせられた。それより数百年さかのぼった西暦680年の秋に数千キロメートル離れたイラク南部の砂漠地帯の“カルバラ”というオアシスで、預言者モハマドの孫アルフサインが庇護者のイラク人シーア派に見捨てられ敵の兵に惨殺されてしまった。義経とアルフサインとは全く縁もゆかりもない二人の有名な歴史上の人物であるが、両者とも味方に裏切られ見捨てられ怨念を抱いてこの世を去ったという点においては共通している。日本ではこの悲劇の対象になった義経は“可哀想”と思われ“判官びいき”というイメージに留まる。そして、その悲劇は文学あるいは芸能という“柔らかい”イメージに過ぎなかった。一方イラクでは、イラク人はアルフサインを裏切ったことを重大な罪だと認識し今日に至ってなお“自虐祭”という血なまぐさい催しで毎年償いつづけている。国民性の違いで、両人物の悲劇に向き合う表現の仕方が違って来たのであろうが、果たしてこれで義経の亡霊が浮かばれると言えるのであろうか。

【キーワード】 判官びいき，アルフサイン，衣河，カルバラ，つぐない

1 緒言

西暦680年10月のある日、イラク南部砂漠地帯の“カルバラ”というところでイスラム教徒にとって忘れることのできない悲劇が起きた。預言者モハマドの孫アルフサインがカリフとして即位したばかりのヤズイードの軍勢の手によって残酷なやりかたで殺されてしまった。そのとき、味方だったはずのイラク南部の人たちは遥々アラビア半島のイスラム教の発祥地たるマッカ¹⁾から彼らの庇護や応援を信じてやってきたアルフサインを見捨ててしまったのである。そして、シーア派の中心を成すイラク南部のイラク人や西アジアの他のシーア派の人々は今日にいたってもアルフサインを宿敵に売ってしまったその罪を深く認識し償い続けてきているのである。

そして、およそ8400キロメートル離れた地球の反対側とも言うべき、日本の奥州衣川（今の岩手県）で1189年に、かの源義経も悲劇的な死をとげた。実兄の源頼朝が送った数千人に及ぶ軍勢に包囲されてまったく不利な戦の末、家来15、6人とともに義経は最期を迎えたのである。

アルフサインと義経とは全く縁もゆかりもない二人の有名な歴史人物ではあったが、二人とも味方に裏切られ見捨てられ怨念を抱いてこの世を去ったという点においてはまさに共通しているのではないかと思われる。この論文では、アルフサインの悲劇に照らして源義経の最期と“判官びいき”の意味について再検討をしたいと思う。

2 アルフサイン・ビンアリと源義経

2.1 アルフサイン・ビンアリという人物について

626年生まれ、680年10月10日に死没。預言者モハマドの孫としてメディナで生まれた。父は預言者

モハマドの従兄弟アリ（四代目のカリフ）と預言者モハマドの娘ファーテマとの間に生まれた次男であった。兄アルハッサン（五代目のカリフ）が死んでから679年にマッカに向かい、そこで六代目のカリフとして名を挙げられたが、同時にダマスカスではライバルのヤズイードも六代目のカリフとして名が挙げられたのである。間もなくしてアルフサインは、イラク内部のカルバラに集まったモハマド家支持派のシーア派に誘われ庇護を約束された。それを受けて680年の夏、アルフサインはわずか80人の家来や身内を連れて、真夏の太陽が照りつけるアラビア半島の砂漠イラク南部のカルバラに向かって旅立った。しかし、その情報を知ったライバルのヤズイードは3000人の兵力をカルバラへ送り込みアルフサイン一行を待ち伏せ襲撃させた。負傷したアルフサインは敵兵の手に落ち、三日間の拷問の末その首を切り落とされたのである。アルフサインを擁立するはずだったイラク南部のシーア派は、結局彼を見捨ててしまうという結末となってしまった。アルフサインの生首やアルフサインの妻や子どもたちはダマスカスに送られた。

2.2 預言者死後のカリフ権の争いとアルフサインの苦難

預言者モハマドが西暦632年に亡くなってから、カリフ制度が生まれたが、そのときマッカではモハマドの跡継ぎを巡って信者たちの意見は真二つに割れてしまった。これは、預言者の親友たるアブバクルの名を挙げる声と預言者の従兄弟アリを祭り上げようとするいわゆる“血縁主義者”たちの声であった。結局、前者の意見が通り、アブバクルは最初の後継者すなわちカリフとして誕生した。その後はこのように亡き預言者の周辺にいて仲の良かったオスマンとオマルが順番にカリフの座を受け継いでいった。そして四番目のカリフとしてやっと預言者の血を引いた従兄弟のアリが656年にカリフの座に就いたのであるが、アリは間もなくイラクのカルバラで殺害された（661年）。そのときイスラム帝国は大きく広がっていた。預言者モハマドには息子がいなかったため、預言者の孫（娘ファーテマの息子）で従兄弟のアリの長男であるアルハッサンが預言者血縁主義者の応援に押されてカリフの座に就いたものの、シリア総督のムアーウイヤが同じタイミングで自らが新しいカリフであると名乗り出てハッサンとの戦いに挑んだ。イスラム帝国の分離の危機を察知したハッサンは、イスラム教徒同士の殺し合いを避けるためにカリフの座をムアーウイヤに譲り、ムアーウイヤと約定を結んで、メディナへと身を引いた。

しかしモハマド家の支持者、つまりモハマドやアリの血縁主義者たちはその約定に対して難色を示し納得しなかった。不満を抱いた彼らはムアーウイヤの没後、モハマド家の主導権を主張し、すでに亡くなったハッサンの弟アルフサインのことを次代カリフとして強く求めた。しかし、死んだムアーウイヤの長男ヤズイードは自ら新しいカリフとして名乗り出、メディナやマッカにいるアルフサイン支持派と衝突したのである。

2.3 源義経について

1159年生まれ、1189年6月に死没。父源義朝と母と常磐御前おの間に生まれた。義朝の九男として生まれ、幼少の頃は“牛若丸”と呼ばれた。父義朝が平家の兵士の手によって殺されてから、母に連れられて平家頭領の平清盛のもとで育てられた。7才のとき、京都郊外の鞍馬寺に預けられたが、父の仇討ちを煽られ鞍馬山を脱走し金売り吉次に案内されて平泉に向かった。兄頼朝に再会してから平家打倒のため源氏兵力の将軍となった。一の谷、屋島、壇ノ浦の一連の合戦を経て平氏を滅ぼした。しかし、頼朝の許可も得ずに後白河法皇に検非違使に任じられ、家来の梶原景時の讒言のために頼朝の怒りを買って、朝敵とされてしまった。全国指名手配の身になったが、16人の家来を従えてうまく奥州に辿りついた。そこで奥州藤原の頭首藤原秀衡の庇護を受けた。しかし秀衡が死ぬと跡継ぎの泰衡に裏切られ衣川で無残な最期を迎えてしまった。

3 イスラムの歴史における“旅”と日本の神話、歴史における“旅”

イスラムの歴史においては“旅”というのは重要で基本的な要素を成している。何より、イスラムの基本的な修行の一つである巡礼は、イスラム世界各地から聖地マッカへの長い旅で始まるのである。強いて言えば、聖地マッカへの旅が長ければ長いほど苦しければ苦しいほど、そして道が険しければ険しいほどその分の徳が大きいということである。

イスラム暦の起りも実は預言者モハマドのマッカからメディナへの逃避行がきっかけであった。預言者モハマドはマッカの人々のいじめや拷問を逃れ親友のアブバクル（モハマド死後の最初のカリフ）を連れて照り付く日差しのもとで灼熱のアラビア半島の砂漠を横断して、長い旅の末メディナにたどり着いた。旅の途中で身の毛の弥立つような試練をいくつか潜りぬいた。預言者の孫アルフサインもあれから数十年経ってからマッカから西の方向にあるイラク南部のカルバラーを目指して70人の家来や身らの女房たちや子供たちを連れて長い旅をした。

日本の神話や歴史を振り返ってみた場合、色々な形や目的の旅があったことがうかがわれよう。オオクニヌシノミコトの因幡の国への旅、ヤマトタケルノミコトの相模の国への旅、光源氏の須磨への旅、玉鬘（たまかづら）の長谷寺への旅、在原業平の東の国への旅、山伏の修行の旅そして源義経の奥州への旅などである。

4 アルフサインのカルバラーへの旅と義経の奥州への旅

アルフサインのカルバラーへの旅と義経の奥州への旅の共通したところは、両方とも死への運命の旅だったところにあり、信用し切った庇護者に裏切られ見捨てられたしまうための悲しい運命への旅というところに他ならない。

4.1 アルフサインのカルバラーへの旅

前述したように、カリフの座を巡る取り合いでアルフサイン・ビンアリ支持派とダマスカスにいたヤズィード・ビン・ムアウイヤの支持派との小競り合いや衝突が繰り返された。そのような中、アルフサインはイラク南部の支持派に誘われマッカを離れてカルバラーに向かったのである。その道中においては様々な出来事があった。

アルフサインはカルバラーの人々から数百通の手紙を受けて支持や応援を約束された。そこでアルフサインはカルバラーの状況を探るために従兄弟のムスリム・ビン・ウカイルを先に送り込んだ。ムスリムがカルバラーに着くとカルバラーの住民に手厚いもてなしを受けた上、18,000人ぐらいのアルフサイン支持派の集会に出席した。その集会ではヤズィードへの謀反とアルフサインの擁立が声高く叫ばれた。これを受けてムスリムは早速アルフサインにゴーサインを打診した。それでも、アルフサインの周囲にいた友人たちの多カルバラーアルフサインのカルバラー行きに対して警戒心を抱いていた。しかしイラク人の忠誠心を信じ込んでいたアルフサインはその周囲の反対を押し切って旅立ちを決心した。

そのころはすでにカリフの座に就いたヤズィードの耳元にはマッカの情報が入っていた。ヤズィードは先ず、カルバラーの謀反を黙認したカルバラーの代理ノーマン・ビン・バシールを引き摺り下ろし、そして次にカルバラーの部族長たちに警告を送った。そこでカルバラーの人たちは手のひらを返すようにアルフサインへの支持をあっさり諦め、アルフサインの従兄弟ムスリムに背を向けてしまったのである。結果として、間もなくムスリムはヤズィードの追っ手に捕えられ無残に殺されてしまった。この情報を知らずにアルフサイン一行はすでにマッカを離れてカルバラーに向かっていた。旅の途中は、アルフサインとその一行は何人かの支持派に道中のオアシスに泊めてもらい手厚くもてなされ、そしてついにイラクの地に入ったころ、従兄弟ムスリムが殺害されたことを知らされた。しかし、この情報を信じようとしないアルフサインはそのまま旅を続けてしまったのである。アルフサインは内心ヤズィード支持派や軍勢との衝突をできるだけ避けようと思っていたと言われ、実はカルバラーを目の前にしたア

ルフサインは薄々と身の危険を察知していたのである。

4.2 義経の奥州への旅

4.2.1 義経の旅の始まり

一方義経は、壇ノ浦の大勝利による平家絶滅の結果、数千人の兵士たちの間で圧倒的な人気を博した。壇ノ浦の海戦の際、義経は兄頼朝の家来の梶原影時と作戦をめぐって意見衝突をした。これが世に言う“逆櫓事件”のことである。意見を無視された梶原は義経に対して反感を抱き、主人の頼朝の耳元に義経の傲慢ぶりを囁き頼朝を煽ったのである。

院内の見参に入って後、去ぬる元暦元年に檢非違使五位尉になり給ふ。太夫判官、宗盛親子具足して、腰超に着き給ひし時、梶原申しけるは、「判官殿こそ大臣殿父子具足して、腰超に著かせ給ひて候なれ。君は如何御計らひ候。判官殿は身に野心を挟みたる御事にて候。(中略)。天に二つの日なし。地に二人の王なしといへ共、此後は二人の將軍やあらんずらん」と仰せ候ひしぞかし。

これは“梶原影時の讒言”で知られている事件である。義経はまた京都に凱旋して、後鳥羽天皇と後白河法皇に褒められた上、檢非違使の別当に任命された。そのときからこの職名に因んで“判官義経”と呼ばれるようになったが、このことを知った頼朝は一層弟義経に対して危機感を抱いた。その一方で義経は、兄が自分を恨んでしまっているという内容の情報が耳に入り、心中泣くに泣けない気持ちであったことは容易に想像がつく。せつなく長い苦勞の末、兄弟が力を合わせて宿敵の平家を滅ぼし事実上源氏が天下を治めたというのに、である。

義経は兄頼朝に自分の忠誠心を証明しようと、いわゆる“起請文(きしょうもん)”を送ったが、頼朝の心中は変わらなかった。結局これで兄弟の仲は絶縁し、敵味方に分かれてしまうことになる。義経追討軍は鎌倉を出発して京都に向かった。この噂が京都中に広まると後白河法皇は公卿会議を開き本件について話し合った。結果として、法皇は時の実力者たる源頼朝につくことを選んだ。これで事実上、法皇は義経を見捨てることにし、一夜にして義経は“朝敵”に変わってしまったのである。法皇がこの事態を黙認する中、頼朝の義経追捕命令は日本全国の関所や寺々に回っていた。関所の番兵や寺々の衆徒を総動員して、義経とわずか16人の義経の側近の家来たちを捕えようというものであった。この時点から義経たちの逃避行の“旅”が始まった。

4.2.2 義経の旅の道程

義経に忠実な佐藤忠信は六人の家来とともに頼朝の追っ手を杉山の中で待ち受けながら、義経と同僚を先に逃がした。一方、義経は平泉の藤原秀衡を頼りに北陸の険しい山道を目指した。時はちょうど真冬の雪が降る厳しい寒さであった。義経一行は山伏の姿に変装しゆっくりと北陸道を進んでいった。これは、主導的な立場に変わった弁慶も義経自身も山伏について詳しくなかったからである。

先ず、近江の海津を出て愛発山(あらちやま)の峠を越えた義経一行の前に立ちはだかったのは“三の口関所”であった。

判官は海津の浦を立ち給ひて、近江国と越前の境なる愛発の山へぞかかり給ふ。一昨日都を出で給ひて、大津の浦に着き、昨日は御船に召され、船心に損じ給ひて、歩み給ふべき様ぞなき。

そこには頼朝の命令を受けて300人の番兵が義経一行を待ち構えていた。一行が関所にさしかかると番兵に取り囲まれてしまったが、しかし山伏姿に変装した義経一行はうまく通りぬけた。その後、一行は敦賀や越前の国府を無事に抜け、越中国に入ったとき、一行は船に乗って渡ろうとしたが、舟子に怪

しました。しかし弁慶のはからいによって一行はうまく舟子を騙してこの難を逃れた。そして数日後、念珠(ねず)の関にさしかかった。ここで見破られてしまっただけでは今までの苦労も水の泡と思った弁慶は番兵の前で主人の義経を殴って一芝居をうった。これにより弁慶は番兵を欺き、一行はまた無事に関所を通ることができた。

義経一行より先に伊勢三郎と亀井六郎という二人の使者が秀衡の元にたどり着き、義経一行がまもなく到着することを伝えると秀衡は大いに喜んだ。一行を迎えるために秀衡は150人の家来を送った。

秀衡判官の御使と聞き、いそぎ対面す。「此程北陸道にかかりて、御下りとは略承り候ひつれども、一定を承はず候ひつるに依って、御迎ひ参らせず。越後、越中こそ恨みあらめ、出羽国は秀衡が知行のところに候へば、各々何故御披露候ひて、国の者どもに送られさせおはしまし候はざりけるぞ。いそぎ御迎ひに人を参らせよ」とて、嫡子泰衡冠者を呼びて、「判官殿の御迎ひに参れ」と申しければ、泰衡百五十騎にて参りける。

そして秀衡は義経たちを“月見殿”という屋敷に住ませた。義経とその家来にとっては、これはまるで地獄から極楽に來たような、願ってもない幸せのひとつときであったが、それから三年足らずで、状況は一変してしまうのである。

5 アルフサインの最期と義経の最期

5.1 アルフサインの最期

カルバラーに着いたとき、アルフサインはカルバラーの人たちが自分のことを見捨ててしまった事実を悟り、身内や子供を集め、泣きながら神の加護を祈った。二日ほど経つとからアルフサインやその一行はヤズィードが送り込んだ数千人の兵力に完全に包囲されていた。アルフサイン一行はそれから四日間に渡って水や食料を絶たれた状態に置かれた。五日目には、アルフサインはヤズィードから一通のメッセージを受けた。その内容は、ヤズィードに従って諦めてマッカに戻るか絶滅されるかのどちらかを選べ、というのであった。

しかし、アルフサインそれを拒否すると、アルフサインをはじめ70人の家来は首を切り落とされてしまった。一方、アルフサインの妻や男女の子どもたちは全員奴隷の身になり遥々ダマスカスにいるカリフ・ヤズィードの元へ送られた。その一行の先頭にアルフサインたちの生首が槍の先に刺さったまま持ち上げられていたのである。

5.2 義経の最期

平泉に入って約三年の月日が経ったが、義経とその身内や家来は秀衡の元で平和な毎日を過ごしていた。しかし1188年の終わり頃、秀衡は重病にかかってしまった。命はもう長くないことを悟った秀衡は自分の息子たちや娘たちを集め、義経たちのことを今までのように守り続けるよう言い残してこの世を去った。しかし秀衡の遺言は空しく、跡継ぎをした泰衡は義経の存在を厄介なものと思い始めたのである。一方、義経の隠れ場所を知った頼朝は新たに義経追討の院宣をもらい、泰衡に追捕を命じた。その代わりに頼朝は泰衡に常陸の国を与えることを約束をした。義経は泰衡の軍勢が押し寄せてくることを待つしか成す術はなかった。そして四月末ごろ、2万人以上の兵は衣河の館へ押し寄せてきた。立ち往生をした弁慶をはじめ、義経の家来たちは次々殺されたり自害したりしていき、ついには義経も自刃して果てた。

兼房目も昏れこころも消えて覚えしかども、「かくては叶はじ」と、腰の刀を抜き出し、御肩を押しさえ奉り、右の御脇より左へつと刺透しければ、御息の下に念佛して、やがてはかなくなり給ひぬ。

(中略)判官殿未だ御息通ひけるにや、御目を御覧じ開けさせ給ひて、「北の方は如何に」との給へば、「早御自害有りて御側に御入り候」と申せば、御側を探らせ給ひて、「是は誰、若君にてわたらせ給ふか」と御手差渡させ給ひて、北の方に取りつき給ひぬ。兼房いとど哀れぞまさりける。「早々宿所に火をかけよ」とばかり最期の御言葉にて、こと切れ果てさせ給ひけり。

残った一人の家来兼房は主人義経の妻と若君、生まれたばかりの姫君を刺し殺す。その後、泰衡は義経の首を鎌倉に送り、それから三ヶ月も経たないうちに泰衡をはじめその身内300人以上は、頼朝が派兵した兵に殺され奥州の藤原氏は滅びてしまうのである。

6 “殉教者”のアルフサインと“判官びいき”の義経

6.1 歴史的存在としてのアルフサインと伝説の義経

アルフサインと義経という二人を比較するに当たって、“英雄”という範疇で比べることはまずできない。というのは、アルフサイン自身は特に武術に優れてはいなかったし、英雄という点においては確かな記録は残っていないからである。アルフサインはその圧倒的な人気を得て、イスラム教徒シーア派の中心的なシンボルとなったのは、彼が預言者モハマドの孫であるにもかかわらず、シーア派に見捨てられ、前述のような無残な死に方をしてしまったからである。

また、アルフサインは歴史的な人物として、その自伝が語り継がれ、史料に書き留められた。しかし義経のようにはっきりとした“伝説”の主人公に作り上げられることはなかった。

反対に、義経は歴史的に実在した源氏の中心的な人物であることに加え、れっきとした伝説の主人公・英雄としてその名前が残っている。“義経伝説”や“義経記”という語りや写本の他に、後からあらわれた能楽、歌舞伎、浄瑠璃などの様々な芸能の材料には、史実や虚構の入り交ざった“伝説の義経”がさらに語り続けられている。

6.2 アルフサインの最後とシーア派の自虐祭

しかしその代わり、アルフサインの最期を悲しむシーア派の間では“自虐祭”(アシュラ)という大きな祭りが作りあげられた。この祭りは毎年10月10日にイラク南部のカルバラーで大々的に行われる。そこで集まるシーア派の数十万人の大衆はカルバラーやカルバラーの街角を練り歩き、アルフサインの死を悲しむ黒一色の喪服を着て右手で永遠に自らの胸部を叩きながら泣き叫ぶものである。過激的な者たちは鎖やナイフなどで自らの背中や胸や頭を叩いたり切ったりして血まみれになってしまうのである。とてもグロテスクで激しい表現の仕方と言える。しかしその分、彼らのアルフサインに対する深い謝罪の念が含まれているのである。彼らは、自分たちの祖先が1300年以上前にアルフサインを見捨てて裏切った罪の意識に駆られ、代々その償いを受け継いできており、さらに生まれてくる次の世代へと将来にわたって永遠に引き継がれていくことになるのであろう。

6.3 “判官びいき”の義経

一方、日本特に義経が殺された東北地方では、このような形の祭りめいた催しなどは行われていないし、義経の最期を悲しみ追悼する儀式などもない。

先述したように、義経はすくなくとも二回にわたって見捨てられ裏切られたのである。一回目は後白河法皇が頼朝の怒りを買わないように義経を捨石同然にしたときである。二回目は奥州の泰衡たちが義経のことを厄介払いにして見捨てて死に追いやったときである。

アウトサイダー的な視点から見れば、これは英雄義経に対する重大な“罪”であろう。日本ではこの悲劇の対象になった義経は“気の毒”で“可哀そう”と思われ、“判官びいき”というイメージに留まっていた。そしてこの悲劇は文学や芸能という“柔らかい”イメージを過ぎなかった。“判官びいき”とい

うイメージができあがったはっきりとした経緯は認められないが、この点において、島津基久(1935)の意見を次のようにまとめることができよう。つまり、源義経は国民の希望と努力によって益々偉大となり、国民はまた自ら作り上げた偉大なる英雄を尊仰して、その感化恩沢を受けようと願うのである。“判官びいき”という話は何時ごろから起こったかは明らかではないが、すくなくともこの言葉に象徴されている精神は、すでにおそらく義経在世中から台頭していたであろうことは想像に難しくないし、室町期にいたっては最早頂点に達し、徳川期にはほとんど常識化してしまっていることも事実である、というのである。

7 結語

国民性の違いにより、イラク人のアルフサインの悲劇やその裏切りに対する姿勢や反応は、日本人の義経の悲劇や裏切りに対する姿勢や反応とは決定的に異なっており“激しさ”や“柔らかさ”という対照的な形で表現されたのかもしれない。

しかし、ここで残される疑問は、果たして義経の悲劇はただ単に“判官びいき”の形に片付けられてしまってよいのであろうか、果たしてこの重大な歴史的な事件に終止符を打ち、すました顔でいられるのであろうか、というものである。今後さらに研究を進めていきたい。

付記

本論考は、富山大学国際交流センター主催の第2回講演会「帰国後活躍する気鋭の“日本研究”外国人研究者によるシンポジウム」(2016年2月10日(水) 富山大学五福キャンパス)において、筆者が講演した内容をもとに論究し書き下ろしたものである。

注

- 1) マッカはアラビア語では、(مكة Makkah ['mækkæ])。日本語でメッカと表記されることが多いが、1980年代サウジアラビア政府は、公式な英語表記を Mecca ['mekə] からアラビア語の発音通りの Makkah ['mækkæ] に改めたこともあり、本稿における表記は「マッカ」に統一した。

参考文献

- (1) 『義経記』, 日本古典文学大系, 岩波書店, 1982年.
- (2) 市川孝一, 「Social Type としての「英雄」像・価値意識研究に向けて」(論文)・『一橋研究』第30号・218-234, 1975年.
- (3) 上横手雅敬, 『源義経 源平内乱と英雄の実像』, 平凡社, 2004年.
- (4) 奥富敬之, 『源義経の悲劇』, 角川書店, 2004年.
- (5) 数江教一, 『源義経』, アテネ新書, 1954年.
- (6) 桜井啓子, 『シーア派・台頭するイスラーム少数派』, 中公新書, 2006年.
- (7) 佐々木八郎, 『語り物の系譜』, 笠間書院, 1977年.
- (8) 佐藤謙三・小林弘邦, 『義経記・2』, 平凡社, 1968年.
- (9) 島津久基, 『義経伝説と文学』, 大学堂書店, 1935年.
- (10) 鈴木則郎, 『「平家物語」における源義経像についての一考察」(論文), 『東海大学日本文化研究所研究報告』, 第22集, 1986年3月.
- (11) 関幸彦, 『義経記・伝説に生きる英雄』, 清水書院, 1990年.
- (12) 土橋治重, 『源義経・物語と史跡をたずねて』, 成美堂出版, 1972年.
- (13) 和歌森太郎, 『判官びいきと日本人』, 木耳社(オリエントブックス), 1971年.

アラビア語の参考文献

- (14) IBN AATHAM, 『ALFUTUH』, DAR ALADWAA PUBLISHING (BEIRUT), 1991.

- (15)IBN ALATHEIR,『ALKAMEL FI ALTAARIKH』, DAR BEIRUT (BEIRUT), 1945.
(16)IBN ALTAQTAQY,『ALFAKHRY FI ALADAAB ALSULTANEIYA WAL DUWAL ALISLAMEIYA』,
DAR ALQUALAM ALARABY (BEIRUT), 1997.
(17)JAWAD MAHDATHY,『ENCYCLOPEDIA OF ASHURA』, DAR ALRASUL ALAKRAM PUBLISHING,
1997.

引用資料

- 1・『義経記』, 日本古典文学大系, 岩波書店, 1982年, 142~143.
- 2・同上, 317.
- 3・同上, 359.
- 4・同上, 385~386.